

Co だより

オープンダイアログ・ワールドカンファレンス

平成31年2月3日(日) 会場：東京大学本郷キャンパス大講堂(安田講堂)

オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン(ODNJP)の平成30年度4回目の主催行事。日本でのオープンダイアログの実現にむけて、東京、京都の2会場でワールドカンファレンスを開催した。以下は、東京会場での報告である。

1. オープンダイアログと中動態

筑波大学教授 齋藤 環 氏

中動態的外在化について

依存症の人は意志が弱いであるとか、能動・受動は自己責任であるとか、依存症が「意志」の問題になってしまっている。中動態的に捉え、「外在化」し、「病気」として捉える。止めるとか止めさせるとかではなく、「止む」のである。

オープンダイアログの7つの原則の6番目である「不確実性に耐える」は、画期的である。プランをしないで曖昧な状況を支えることが、よい変化をもたらすのである。



個人精神療法では、専門家と患者は、能動・受動の関係である。依存関係に陥ると、転移や逆転移、退行を引き起こす。「治療チームの発想」においては、中立性からの解放が起こり、聴取の文脈の複線化(ポリフォニー)が生まれる。そして、リフレクティングで、患者の能動性を囲い込む。ここで、病的経験に言葉を与える意味は、言語化することで、よい方向に向かうからである。無意識の葛藤が精神疾病を引き起こすが、文章にすることで、少しずつ妄想がゆるみ、幻聴も聞こえなくなってくる。文字に置き換えるということに意味がある。「私には聞こえないので、どんな風に聞こえるか教えてください」と尋ね、主観で答えを出す。「抽象の力」が客観性を生むのである。「幻聴」について内容を聞いてしまうとダメになるというのは嘘であった。コミュニケーションシステムの一要素としてミーティングを行うが、患者の能動性をコントロールするのではない。システムの一要素として、治療者は振る舞わなければならない。

マイケル・ホワイトのナラティブ・セラピー(Narrative Therapy)から端を発した「外在化技法」では、「人が問題」なのではなく、「問題が問題」なのである。主語を過程の内部に位置づけるとトラブルが常に患者につきまとい、無力感が強くなってしまふ。価値判断を保留にすることで、外在化を容易にし、中動態的外在化を果たし、ナラティブが回復する。「治らない自由を許容する場のみが治る自由を許容する」

のである。

2. 米国におけるオープンダイアログと対話実践の適応と実施

マサチューセッツ・メディカルスクール大学、カリフォルニア大学サンディエゴ校所属

Douglas Ziedonis 氏

米国では、臨床家のバーンアウトが起こっている。しかし、オープンダイアログの実践においては、副産物として、臨床家が精神的に豊かになり、情熱がもてるようになっている。マインドフルネス瞑想を実践家が行うことで、沈黙に耐えることも行っている。ピアスペシャリストの活躍も重要である。



3. 米国におけるオープンダイアログ・アプローチの歴史

マサチューセッツ・メディカルスクール大学、スミス・カレッジ・フォー・ソーシャルワーク所属

Mary Olson 氏

オープンダイアログは、米国では、10年ぐらい前から注目を集め始めた（実は、アメリカから生まれた考え方がオープンダイアログにも影響を与えている。ネイティブ・アメリカンたちから教わった方法やネットワークセラピーなどである）。なぜ、注目を集めたかということ、サービスを受ける当事者から、今までの治療では効果が出ないということが叫ばれ、他で支援を受けるべき人たちまで来るようになったからである。2010年代に目立つようになったリカバリームーブメントやピアスペシャリストの活躍も後押ししてきた。診断を受けることは、死刑宣告ではないということに繋がるからである。

しかし、助成金は出ず、険しい道のりであった。「目の前に川があるときは、どこからか水が流れてくる」ことを信じた。何かをするというよりも共に居る・繋がることで孤独を減らし、症状を減らす。多文化・多民族を超えて伝わるものである。

4. ノルウェーにおけるオープンダイアログの歴史

ノルウェー科学技術大学所属 Mark Steven Hopfenbeck 氏

患者をラベル付けし、「あっちの人間」とした時代が長すぎた。「We are all peers」、健康と病気の区別はない。みんな人間。精神疾患も人間的反応なのである。我々が自分自身について学ばなければならない。大学では、学生により人間的になるようなトレーニングもしているが、シンプルであるが故に難しい。支援者が、無条件のあたたかさや思いやりをもつことは、学ぶことから始まる。



認めて、大事に思うことは簡単ではない。そうするとき自分の背景が邪魔をする。自分自身の困難さが立ちほだかる。東洋では、馴染みのあるマインドフルネスであるが、西洋では、新しい概念である。我々は、マインドフルネスを学び、今ここにあること、オープンであること、思いやりをもつことをトレーニングしているのである。誠実であること、内省的であること、信じるに値する人と思われること

が必要である。